

水の哲学

ワーズワース

「群れ集いたる黄水仙 湖水のほとり木々の下 風にひらめき踊るなり」

イギリス・ロマン派を代表する詩人のウィリアム・ワーズワース（1770—1850）はイングランド北部スコットランドの湖水地方近くに弁護士の子として生まれた。少年時代に相次いで父と母を失い、5人の兄弟姉妹は離れ離れに育てられた。

ケンブリッジ大学に進んだのち1791年に渡仏し、自由・平等・博愛を掲げたフランス革命に深く共鳴する。当地で内縁の妻と娘をもうけたものの、共和制の変節による恐怖政治に失望して帰国。その後、1歳下の妹ドロシーと湖沼地方に移り住み、詩作に耽った。

1798年にサミュエル・コールリッジと共同出版した『リリカル・バラッズ』（叙情歌集）が反響を呼び、広く知られるようになる。晩年の1843年にはロバート・サウジーに続いて国王から任命される桂冠詩人となって名声を不動のものとした。

湖水地方で生まれ育った詩人

ワーズワース、コールリッジ、サウジーの3人はLake Poets = 湖畔詩人と呼ばれたように湖水地方と共に詩作生活を送った。

湖水地方はイングランド北西部のカンブリア地方の通称でスコットランドとの国境に位置する。点在する湖沼群は氷河時代につくられ、イギリス

でもっとも美しいと言われる風光明媚な自然は多くの芸術家たちに創作的インスピレーションを与えてきた。

世界一愛されたウサギとなるピーターラビットの作者のビアトリクス・ポターもそのひとりだ。彼女が住んでいたニアソーリー村やウインダーミア湖にはワーズワースの家として有名なダブコテージやワーズワース博物館と共に数多くの観光客が訪れている。

湖水地方は1895年に開始されたナショナル・トラスト運動でいまでも乱開発から守られている。ナショナル・トラスト運動は土地を購入した所有者が自然環境や歴史的建造物を保護する市民運動



でポターも賛同者となった。ピーターラビットによる収入で取得した土地はすべてこの運動のために寄贈されているという。

深く静かな思索による回想

表題の「群れ集いたる黄水仙 湖水のほとり木々の下 風にひらめき踊るなり」という詩句は『ロマン派詩選』（研究社）所収の「黄水仙」の一節で「水仙」というタイトルでも名高いワーズワースの代表作だ。

内容は湖のほとりをひとりさまよい歩いていた私＝ワーズワースが黄金色に輝く水仙の花の群れと出会ったときの感動を綴ったもので英語の教科書などにも掲載されている。締めくくりのフレーズは私が悄然として長椅子に横たわっているとき、その情景を思い出すと心が歓びに充ちあふれ、水仙の花の群れと一緒に踊りだすという回想形式になっている。

ワーズワースが湖水地方のアルズウォーター湖畔で過ごし、水仙の大群と遭遇したのは1802年のことで実際はひとりではなくドロシーも一緒だった。水仙の詩が書かれたのはそれから2年後になる。

この詩の回想形式についてはワーズワース自身が1801年に再版された『リリカル・バラッズ』の序文で「詩は感情を静かに回想したときに生まれてくる」と詩作方法の一端を開示している。誰でもわかる言葉を使い、感情をありのままに表出



したようなワーズワースの詩が実は時間をかけた深い思索の産物であったことをうかがい知ることができる。

自然と人間の精神的な交感

ワーズワースの詩作の源泉となった湖水地方の自然はたんなる美しい観賞的存在ではなかった。それは水仙の詩からも明確に読みとることができる。

黄金色に輝く水仙とワーズワースは自然と人間という二元論を超えてスピリチュアルに交感する。長椅子に横たわって孤独と失意のうちにある私の心がふたたび歓びに充ちあふれ、水仙の花と一緒に踊りだすというフレーズはそのことを象徴的に表現している。

「我思う、ゆえに我あり」という近代的自我を確立したデカルト以降の西欧的合理主義は自然を人間から切り離された科学の対象と見做すようになった。ワーズワースの自然観はこれと対照的に自然と人間の精神的な一体感を謳いあげる。

自然詩人とも呼ばれたワーズワースにとって自然は人間を高揚させる偉大な存在にほかならなかった。哲学的には自然の細部に神々が宿っているという汎神論的な世界観を抱いていたといっているかもしれない。

湖のほとりで光輝く水仙の群れは自然の根源的な生命力と一体化した人間の姿と見做すこともできるだろう。（高倉）